

日本資本主義の父

しづさわ えいいち

渋沢 栄一 (1840-1931)

第一国立銀行ほか



§ 人物データファイル

渋沢史料館所蔵

出生

天保11年2月13日(1840)、武蔵国^{はんざわごおりちあらいじま}榛沢郡血洗島村(現・埼玉県深谷市)に養蚕と製藍を営む市郎右衛門・栄^{いちろう えもん えい}の長男として生まれる。幼名は市三郎、6歳の時に母の名をとって栄治郎と名付けられた。

生い立ち

生家は血洗島に十数軒ある渋沢家の宗家(中ノ家と呼ばれた渋沢一族の支流の一つ)で、当主は代々、市郎右衛門と称した。父は宗家に婿養子にきた人で、性格は非常に真面目であり、些細なことでも几帳面におこなった。勤勉家でもあり、農業をはじめ、養蚕、藍の製造・販売、村人に金の融通もするなど農・工・商・金融を兼ね営んでいた。こうした家庭環境の中で栄一は育つことになる。

また、市郎右衛門は初めは武家になって身を立てようとしたこともあり、武芸はもちろん、学問も四書五経は十分に読め、晩香と号するほど俳諧にも通じていた。栄一が6歳になると、父自ら漢籍の素読を教えた。栄一は卓越した記憶力を持ち、知識欲も盛んだったため、1年の間に、孝経・小学・大学・中庸と進み、ついには論語まで及んだという。

7歳になると隣村の^{おだかあつただ}尾高惇忠の許へ通い、四書五経のほかにも『国史略』『日本外史』なども学んだ。尾高は栄一の従兄で10歳ほど年長であった。学問を好み、博覧強記で志士的な風格も備えていた人である。栄一は、剣術も12歳頃から学んでいる。稽古にも熱心で上達も速かったようである。

14歳になると、近村を回り、家業の藍の製造に欠かせない藍葉の買い付けをおこなっている。栄一の初めての商売であった。安政5年(1858)、一

般的な名を栄一郎と改め、本名を栄一とした。同年の12月に尾高の妹の千代と結婚する。

実業家以前

文久3年(1863)は、栄一の生涯を通してもっとも特筆すべき年であったと言えるかもしれない。嘉永6年(1853)のペリー艦隊来航を機に鎖国体制は終わり、安政5年(1858)には米国等と修好通商条約が結ばれた。開港と自由貿易による経済混乱の中、外国人排撃を唱える攘夷論が尊王論と結びついて過激化し、文久3年には朝廷が幕府に攘夷の実行を迫るなど、尊王攘夷運動が高揚していた。これらの動きに呼応して、栄一は尾高惇忠、従兄の渋沢喜作と共に攘夷計画を密議したのである。

その計画とは、まず高崎城を乗っ取り兵備を整えた後、鎌倉街道を通して横浜に行き、横浜を焼き討ちにして、外国人を片っ端から殺害しようというものであった。彼らは70名近い同志を集めるほどであったが結局、惇忠の弟で尊皇攘夷運動家の尾高長七郎に説得されて中止。事が露見したわけではなかったが、幕府の取り締まりもあるため、故郷に残るのは危険と判断した栄一と喜作は、一橋家の用人平岡円四郎の家来という名目で京都へ逃げた。

京都で平岡の推薦で徳川慶喜に面会し、一橋家の家臣となる。やがて、慶喜は将軍となり、運命の悪戯であろうか、栄一は幕臣になってしまう。さらに、大きな人生の転換期が待ち構えていた。慶喜の弟、昭武を公使とする遣欧使節団に随行を命じられたのである。慶応3年1月(1867)横浜からフランスに出発した。渋沢のこの2年近いヨーロッパでの体験が、その後の日本の近代化に非常に大きく貢献することになる。

明治元年11月(1868)に帰国。江戸幕府はもはや無く、新政府が国を動かしていた。栄一は慶喜が謹慎中であった駿府に赴き、駿府藩の勘定組頭となる。明治2年、明治政府に仕官し、民部省に入り租税事務の処理にあたる。翌3年、大蔵省に属し、4年5月には大蔵権大丞ごんのたいじょうとなった。国立銀行条例の起草立案をおこない、第一国立銀行や抄紙会社の設立などに尽力したが、明治6年5月、財政改革における主張が受け入れられず、大蔵省

を辞任した。

実業家時代

渋沢栄一は、生涯で500以上の会社の設立や運営に関わったといわれている。逐一列挙するわけにはいかないのですが、ここでは業種別に主なものを見ることにする。

34歳で大蔵省を退官した後、すぐに自ら設立に関わった第一国立銀行の総監役に就き、開業の準備にあたっている。後に頭取として同行の発展に努めた。この第一国立銀行は後に、合併を繰り返して第一勸業銀行となり、現在のみずほ銀行へとつながっていく。この他、第十六、十九、二十、七十七などの国立銀行の設立を指導し、日本勸業銀行、北海道拓殖銀行、秋田銀行、台湾銀行などの設立・運営にも協力している。

明治5年（1872）に設立した、わが国最初の洋紙製造会社である抄紙会社の社長になり尽力した。これは後に王子製紙となり、更なる発展を遂げている。

紡績関連の会社の設立にも尽力する。これもわが国最初となる大阪紡績会社の相談役を務める。後に三重紡績株式会社と合併して、東洋紡績株式会社となる。その他、鐘淵紡績会社、京都織物会社、東京毛織物株式会社、帝国製麻株式会社、大日本紡績連合会の創立等にも関わった。

運輸・交通関連では日本郵船株式会社の前身にあたる東京風帆船会社の創立に努める。また、わが国最初の民営鉄道である日本鉄道株式会社の創立に貢献したり、参宮鉄道、北海道炭礦鉄道、筑豊興業鉄道、北越鉄道、東京鉄道、京阪電気鉄道、東洋汽船、日清汽船、上武鉄道などの各株式会社の相談役や創立委員長等も務めた。

その他、浅野セメント工場の設立にあたっては、浅野総一郎に多大な援助をしている。その浅野とは東京瓦斯会社の創立の際にも協力している。東京電燈会社、東京人造肥料会社、日本煉瓦製造会社、帝国ホテル会社、札幌麦酒会社、東京電力株式会社、東洋硝子製造株式会社、明治製糖株式会社、渋沢倉庫株式会社などなど、渋沢が関わっていない業種は無いのではないと思われるほど、広範に活動している。理化学研究所の副総裁や

日本放送協会の顧問も務めているほどである。

このように数多くの会社に関わったといわれるが、その正確な数はまだ分かっていない。現在、渋沢栄一記念財団が運営している実業史研究情報センターで、渋沢に関わった会社の変遷を調査している。いずれ大きな成果が挙がるであろう。渋沢は財を築く目的で多くの会社の創立や運営に関わったわけではなかった。先進的なヨーロッパ諸国の実情を目の当たりにした彼が目指していたのは、一刻も早く日本にも近代産業を根付かせ、発展させることであった。

そのため、東京商工会議所の前身にあたる東京商法会議所、東京商工会、東京商業会議所の会頭を歴任し、政府に対して実業界の重要性を説き、その発展に寄与したのである。

社会・文化貢献

渋沢は70歳を迎えた明治42年（1909）6月、金融関係以外の企業の役職を退いた。その数はおよそ60社にのぼる。さらに大正5年（1916）10月には金融界からも引退した。そして、社会公共事業に尽力することになる。

渋沢は実業家時代より、将来の実業家・技術者を育成するため、東京高等商業学校、大倉高等商業学校、高千穂学校、東京高等蚕糸学校、岩倉鉄道学校などの実業学校の創設や発展に寄与してきたが、引退後は国際親善、世界平和の促進、道徳の刷新、実業教育及び女子教育の振興、学術文化の助成など公共事業、社会事業に力を入れた。

実業関係で関わった会社は約500といわれるが、公共・社会事業関係は600を超えているという。渋沢は単なる実業家、資本家ではなく、国民の生活の向上や国際社会において、外圧に十分耐えうる日本の基盤の確立を目指した人物であったといえる。

また、幼少の頃より親しんだ論語は、彼の経営理念、生き方に多大な影響を与え続けた。論語を道徳教育の規範として「論語算盤説」「道徳経済合一説」を唱え、実業界の道徳の水準を高めようとした。

その論語や漢詩などを人からの求めに応じ、よく書にしたためている。「青淵」を号としているが、これは生家の裏にある池が由来となっている。

晩年

亡くなる前年の昭和5年（1930）には、父市郎右衛門の手写した習字手本や俳句の草稿等を集めた『晩香遺薫』を刊行している。翌6年11月11日、永眠。享年91歳、大往生であった。飛鳥山の自宅から青山斎場に向かう車の列は100台にもなり、沿道には3万人ともいわれる人々が渋沢の葬列を見送った。東京上野の谷中墓地に埋葬されたが、同墓地内の歩いて2分ほどのところに、かつての主君だった徳川慶喜の墓所もある。渋沢は生前、慶喜の近くで眠れることを喜んでいたという。

関係人物

渋沢が関係している人物は数え切れないほどいるので、ここでは敢えて、親族の中で著名な人物を紹介するに留めておく。

渋沢秀雄 栄一の四男。東京帝国大学法学部を卒業後、日本興業銀行に勤務、その後オリエンタル写真工業、目黒蒲田電鉄、東宝映画などの監査役を務める。東宝の取締役役会長にもなったが、むしろ随筆家として知られている。著書の中には栄一を取り上げたものもある。『父を偲ぶ』『渋沢栄一』『父渋沢栄一 上・下』など多数。

渋沢敬三 栄一の孫。財界人であり、民俗学者でもあるという変わった経歴を持つ。栄一の懇願により大学の進路を変更、東京帝国大学経済学部を卒業し、横浜正金銀行に入行、ロンドン支店などに勤務した。岩崎弥太郎の孫と結婚、第一国立銀行の副頭取などを経て、第二次世界大戦中は日本銀行総裁、終戦直後の幣原喜重郎^{しではら}内閣では大蔵大臣を務めた。

一方、柳田國男との出会いから民俗学にも傾倒する。郷土玩具や化石などを収集した私設博物館「アチックミュージアム（後に日本常民文化研究所と改称、現在は神奈川大学に移管）」を開設、多くの民俗学者を育て、民俗学の父とも言われている。『澁澤敬三著作集』（全5巻）他多数の著書がある。

大川慶次郎 尾高惇忠の甥である大川平三郎の孫、また栄一のひ孫にもあたる。ひ孫くらいになるとちょっと変わった人たちが出てくる。競走馬

を育てるといふ環境に生まれ、馬を見て育った大川は、なるべくしてなったかのように競馬の解説者となる。競馬中継での予想的中率が高く、「競馬の神様」と呼ばれるようになった競馬評論家である。

渋沢元治 栄一の甥。一族の中では珍しく、工学部の出身である。通信省の技師になった後、東京帝国大学教授、同工学部長を経て名古屋帝国大学の初代総長となる。日本の水力発電の開発に貢献した。昭和30年（1955）には文化功労者に選ばれ、それを記念して、電気保安分野で顕著な業績を上げた個人やグループに授与される渋沢賞が設けられている。

澁澤龍彦 栄一の遠戚にあたる作家、評論家。龍彦の家が渋沢家の本流で、栄一の家は支流になる。深谷に栄一の住んだ家が今も残っているが、その近くに龍彦の本家の墓所があり、墓碑には建立者として龍彦の名が刻まれている。なお龍彦は、自身の名の漢字表記に非常にこだわりを持っており、旧字体でない宛名の封筒は開封しなかったという話が残っている。

エピソード

東京都北区のJR王子駅前に飛鳥山公園がある。この公園にはかつて渋沢の本宅があり、そこから王子駅の向こう側にある王子製紙の工場が見えていた。ある日、渋沢は干してある洗濯物に、黒い点のようなものが付いていることに気が付いた。調べてみると、それは製紙工場の煙突から吐き出された煤であることがわかった。渋沢は近隣の住宅にも降り注いでいるに違いないと思い、すぐに善処するよう工場に指示を出し、幸い事なきを得ることが出来た。後日、渋沢は日本で最初の公害だったと語ったという。

渋沢のふるさとである深谷には、彼が理事長や取締役会長を務めた日本煉瓦製造会社があり、上質の煉瓦を製造していた。東京駅を建設する際に使用された煉瓦の9割が、ここで製造されたそうである（そのPRのためJR高崎線の深谷駅駅舎は、駅舎老朽化に伴う建替えの際に東京駅そっくりな建物になった）。日本煉瓦製造会社は既にないが、現在は国の重要文化財に指定されている煉瓦製造窯「ホフマン輪窯6号窯」が、かつての栄華を伝えている。

「渋沢栄一賞」という賞がある。これは埼玉県が、郷土の大偉人である

渋沢の功績を顕彰するとともに、企業家の今あるべき姿を示すため、彼の精神を受け継いでいる企業経営者に対して贈っているもので、全国の経営者を対象にしており、平成23年度で10回目を迎えている。

神奈川県内にある企業の経営者も受賞している。粉が飛び散らないチョークの製造で、国内シェアトップを誇る日本理化学工業株式会社社長の大山泰弘氏（第7回受賞：川崎市高津区）と、防錆の処理を中心とする複合処理や表面処理を一貫でおこなっている、金属製品製造業である株式会社大協製作所社長の栗原敏郎氏（第8回受賞：横浜市保土ヶ谷区）である。2社とも障害者の雇用率が非常に高いことも選定の理由になっている。

企業の活動は私欲ではなく、国民生活の向上のためにあるべきだという渋沢の精神を絶やさず、繋いでいこうというのがこの賞の目的である。

神奈川との関わり

大磯は明治の頃より、政界や財界の大物達が競って別荘を構えた地である。渋沢も家族を連れ、大磯の別荘によく通っている。渋沢の長男の篤二は実業家の才能は無かったようであるが、写真撮影が好きで、『瞬間の累積』という写真集まで出している。その中に大磯の別荘で撮影された写真もある。明治34年頃に大磯から帰る際、伊藤博文と同じ汽車になったことがあった。その車中で渋沢は伊藤より徳川慶喜の逸話を聞いたという。

また、明治19年（1886）4月に横浜市神奈川区にある良泉寺で開かれた、「天下の糸平」こと田中平八の追憶会に、福地桜痴、益田孝らと共に出席している。

§ 文献案内

著作

『徳川慶喜公伝』全8巻 渋沢栄一著 龍門社 1918 〈Y〉

『青淵回顧録』渋沢栄一著 青淵回顧録刊行会 1927 〈Y、K〉

『澁澤栄一滞佛日記』渋沢栄一著 日本史籍協会 1928 〈Y〉

『渋沢栄一全集』全6巻 渋沢栄一著 平凡社 1930 〈K〉

『澁澤栄一自叙傳』渋沢栄一著、小貫修一郎編 偉人烈士傳編纂所 1937 〈Y〉

- 『経営論語』 渋沢栄一著 経営思潮研究会 編 徳間書店 1965 〈Y〉
 『昔夢会筆記』 渋沢栄一編 平凡社 1966 〈Y〉
 『雨夜譚余聞』 渋沢栄一著 小学館 1998 〈K〉
 『論語を活かす』 渋沢栄一著 明德出版社 1998 〈K〉
 『論語と算盤 復刻版』 渋沢栄一著 渋沢栄一記念財団 2008 〈K〉

社史

- 渋沢が関わった企業順に列举し、創業時に近い社史を掲載した。
 『王子製紙社史』 第1～4巻 王子製紙工業 1956～1959 〈Y、K〉
 『第一銀行五十年小史』 第一銀行 1926 〈K〉
 『創業100年史』 品川白煉瓦 1976 〈K〉
 『東京火災保険株式会社五十年誌』 東京火災保険 1938 〈Y、K〉
 『七十七年史』 七十七銀行 1954 〈K〉
 『日本皮革株式会社五十年史』 日本皮革 1957 〈K〉
 『日本郵船株式会社五十年史』 日本郵船 1935 〈Yかな、K〉
 『浅野セメント沿革史』 浅野セメント 1940 〈Y、K〉
 『東京瓦斯五十年史』 東京瓦斯 1935 〈Yかな、K〉
 『東京石川島造船所五十年史』 東京石川島造船所 1930 〈K〉
 『東京製綱株式会社七十年史』 東京製綱 1957 〈Y、K〉
 『大成建設社史』 大成建設 1963 〈Y、K〉
 『大日本人造肥料株式会社創業三十年記念誌』 大日本人造肥料 1917 〈K〉
 『京都織物株式会社五十年史』 京都織物 1937 〈K〉
 『鐘紡製糸四十年史』 鐘淵紡績 1965 〈K〉
 『70年の歩み』 日本煉瓦製造 1957 〈K〉
 『帝国ホテル百年史』 帝国ホテル 1990 〈Y、K〉
 『大日本麥酒株式会社三十年史』 大日本麥酒 1936 〈Y、Yかな、K〉
 『若松築港株式会社五拾年史』 若松築港 1941 〈K〉
 『東京帽子八十五年史』 東京帽子 1978 〈K〉
 『日糖最近十年史』 大日本製糖 1919 〈K〉
 『六十四年の歩み』 東洋汽船 1964 〈K〉

- 『日本勸業銀行創業二十年志』 日本勸業銀行 1917 〈K〉
- 『秋田銀行百年史』 秋田銀行 1979 〈K〉
- 『澁澤倉庫株式会社三十年小史』 澁澤倉庫 1931 〈K〉
- 『廣島電気沿革史』 廣島電気 1934 〈K〉
- 『台湾銀行四十年誌』 台湾銀行 1939 〈K〉
- 『北海道拓殖銀行創業十年誌』 北海道拓殖銀行 1910 〈K〉
- 『日本興業銀行十年史』 日本興業銀行 1912 〈K〉
- 『大阪瓦斯五十年史』 大阪瓦斯 1955 〈K〉
- 『浦賀船渠六十年史』 浦賀船渠 1957 〈Yかな、K〉
- 『朝鮮興業株式会社三十周年記念誌』 朝鮮興業 1936 〈K〉
- 『東京電力三十年史』 東京電力 1983 〈Y、K〉
- 『明治製糖株式會社三十年史』 明治製糖 1936 〈K〉
- 『鐵路50年』 京阪電気鉄道編 京阪電気鉄道史料編纂委員会 1960 〈K〉
- 『帝劇の五十年』 帝国劇場帝劇史編纂委員会編 東宝 1966 〈Y、K〉
- 『日清汽船株式會社三十年史及追補』 日清汽船 1941 〈K〉
- 『沖電気100年のあゆみ』 沖電気工業 1981 〈Y、K〉
- 『帝国製麻株式会社三十年史』 帝国製麻 1937 〈K〉
- 『東拓十年史』 東洋拓殖 2001 〈K〉

大正7年(1918)刊の複製。

- 『東洋紡績七十年史』 東洋紡績 1953 〈K〉
- 『日染廿年史』 日本染料製造 1936 〈K〉

伝記文献

- 『澁澤榮一評傳』 生駒糸造著 有樂社 1909 〈Y〉
- 『澁澤榮一傳(偉人傳全集14)』 土屋喬雄著 改造社 1931 〈K〉
- 『左傾児とその父』 白柳秀湖著 千倉書房 1933 〈K〉
- 『澁澤榮一伝』 幸田露伴著 岩波書店 1939 〈K〉
- 『青淵澁澤榮一翁写真伝』 野依秀市編 実業之世界社 1941 〈K〉
- 『渋沢栄一』 望月芳郎著 紙硯社 1943 〈K〉
- 『青淵澁澤榮一』 明石照男編 澁澤青淵記念財団龍門社 1951 〈Y、K〉

- 『激流 澁澤榮一の若き日』大佛次郎著 文藝春秋新社 1953 〈K〉
- 『澁澤栄一伝（日本財界人物伝全集1）』土屋喬雄著 東洋書館 1955 〈Y〉
- 『澁澤栄一伝記資料』全58巻・別巻10巻 澁澤青淵記念財団竜門社編
澁澤栄一伝記資料刊行会 1955～1971 〈29巻まではY、K、30巻以降はK〉
- 『澁澤栄一』澁澤秀雄著 澁澤青淵記念財団竜門社 1956 〈K〉
- 『父澁澤栄一 上・下』澁澤秀雄著 実業之日本社 1959 〈Y、K〉
四男による伝記。エピソードも多く書かれている。
- 『論語と澁澤翁と私』岸信介著 実業之世界社 1960 〈K〉
- 『澁澤栄一』山口平八著 平凡社 1963 〈Y、K〉
- 『澁澤栄一と擇善会』田村俊夫著 近代セールス社 1963 〈K〉
- 『太平洋にかけける橋・澁澤栄一の生涯』澁澤雅英著 読売新聞社 1970 〈K〉
- 『明治を耕した話 父・澁澤栄一』澁澤秀雄著 青蛙房 1977 〈Y、K〉
- 『巨いなる企業家・澁澤栄一の全研究』井上宏生著 P H P 研究所 1983 〈K〉
- 『埼玉の先人澁澤栄一』菫塚一三郎他著 さきたま出版会 1983 〈Y、K〉
- 『日々に新たなり』下山二郎著 国書刊行会 1988 〈K〉
- 『巨星澁澤栄一・その高弟大川平三郎』竹内良夫著 教育企画出版 1988 〈K〉
- 『澁澤栄一（人物叢書）』新装版 土屋喬雄著 吉川弘文館 1989 〈Y、K〉
昭和6年刊の自著をベースにした、澁澤研究の基本書ともいふべきもの。
- 『澁澤栄一 人間の礎』童門冬二著 経済界 1991 〈Y、K〉
- 『澁澤栄一 民間経済外交の創始者（中公新書）』木村昌人著 中央公論社
1991 〈Y、K〉
- 『評伝澁澤栄一』藤井賢三郎著 水曜社 1992 〈K〉
- 『澁澤栄一、パリ万博へ』澁澤華子著 国書刊行会 1995 〈Y、K〉
- 『徳川慶喜最後の寵臣澁澤栄一』澁澤華子著 国書刊行会 1997 〈K〉
- 『公益の追求者・澁澤栄一』澁澤研究会編 山川出版社 1999 〈Y、K〉
- 『澁澤栄一の経世済民思想』坂本慎一著 日本経済評論社 2002 〈Y〉
- 『澁澤栄一 人生意気に感ず』童門冬二著 P H P 研究所 2004 〈K〉
『論語とソロバン』（祥伝社 2000）の改題、加筆・修正版。
- 『小説澁澤栄一 上・下』津本陽著 日本放送出版協会 2004 〈K〉

『渋沢栄一を歩く』田澤拓也著 小学館 2006 〈K〉

渋沢にゆかりのある地を訪ね歩きながら、その業績をたどる。

『渋沢栄一 男の器量を磨く生き方』渡部昇一著 致知出版社 2007 〈K〉

『渋沢栄一 日本を創った実業人（講談社+α文庫）』東京商工会議所編
講談社 2008 〈K〉

『祖父・渋沢栄一に学んだこと』鮫島純子著 文藝春秋 2010 〈K〉

『渋沢栄一 I 算盤篇・II 論語篇』鹿島茂著 文藝春秋 2011 〈Y、K〉
幅広い文化研究で知られる著者による、詳細に調査された大著。

『渋沢栄一 社会企業家の先駆者（岩波新書）』島田昌和著 岩波書店
2011 〈Y〉

『青年・渋沢栄一の欧州体験（祥伝社新書）』泉三郎著 祥伝社 2011 〈K〉

¶ 参考文献

『瞬間の累積』渋沢篤二著 渋沢敬三 1963 〈未所蔵〉

『澁澤敬三著作集』全5巻 渋沢敬三著 平凡社 1992～1993 〈Y〉

『渋沢栄一と日本商業教育発達史』三好信浩著 風間書房 2001 〈Y〉

『渋沢栄一「論語」の読み方』竹内均編・解説 三笠書房 2004 〈K〉

『渋沢栄一、アメリカへ』渋沢栄一記念財団渋沢史料館編・発行 2009 〈Y〉

『青い目の人形と近代日本 渋沢栄一とL・ギュリックの夢の行方』
是澤博昭著 世織書房 2010 〈Y〉

『渋沢栄一の福祉思想』大谷まこと著 ミネルヴァ書房 2011 〈Y〉

『渋沢栄一翁の顕彰とレンガを活かしたまちづくり』埼玉県深谷市編・
発行 [刊年記載なし] 〈K〉

<土屋定夫>

コラム 渋沢より年長の大物実業家たち

本編では渋沢栄一（1840-1931）より前に生まれた実業家を割愛したが、重要な人物について以下に一瞥したい。（生年順。†は代表的伝記文献）

三野村利左衛門（1821-1877）三井家の大番頭。生い立ちは不明な点が多く、浪人した父に従い諸国流浪の後、江戸に出て旗本小栗家の中間などを勤めたといわれる。商家の婿養子となり、両替商を始めて三井両替店との繋がりが出来る。幕末、三井家に多額の幕府御用金が課された際、三井の依頼で勘定奉行小栗忠順と交渉、旧縁を生かし御用金の減額に成功した。これを機に三井の幹部となり、討幕派支持を決断、維新後は新政府との密接な関係を保ち、三井銀行と三井物産の創設など財閥の基礎を固めた。†『三野村利左衛門伝』三野村清一郎著 三野村合名会社 1969（Y、K）

広瀬幸平（1828-1914）住友家の大番頭。近江国の生まれ。少年時から住友家経営の別子銅山に勤務。その後、広瀬家の養子となり、幕末から別子銅山支配本役として維新の動乱期に住友家の中心事業を守った。明治中期まで別子銅山の近代化を推進するとともに、住友家総理事を務め、関西財界の中心的存在だった。†『半世物語』広瀬幸平著 住友修史室 1982（K）

古河市兵衛（1832-1903）古河財閥の創始者。京都岡崎の生まれ。生家の零落で幼少期から苦労を重ねる。安政年間、小野組糸店の古河太郎左衛門の養子となり、小野組で生糸貿易や鉱山経営に従事、小野組破産（明治7）の後、独立して鉱山事業に専念した。渋沢栄一、陸奥宗光らの協力を得て多数の鉱山を経営、特に足尾銅山の産銅力再生による成功が目ざましく「銅山王」と呼ばれたが、一方で足尾銅山は深刻な鉱毒被害を地元にもたらし、大きな社会問題になった。†『古河市兵衛翁傳』五日会 1926（Y、K）

岩崎弥太郎（1834-1885）三菱財閥の創始者。土佐国の生まれ。幕末、土佐藩の貿易事業に携わっていたが、明治初年これを私企業に転換（十九商会、後に三菱商会）、海運業者として新政府の軍需輸送を一手に引き受け、台湾出兵や西南戦争で巨利を得た。高島炭鉱買収、三菱為替店開業、東京

海上保険出資、官営長崎造船所払下げなど事業を多角化し、財閥の基礎を築く。郵便汽船三菱と新規参入の共同運輸の激烈な競争中に死去、事業は実弟弥之助が継承し発展させた。†『岩崎彌太郎傳』 東京大学出版会 1979 (K)

川崎八右衛門（初代）（1834-1907）東京川崎財閥の創始者。常陸国の生まれ。生家は水戸藩為替御用達を行い、自身も藩の銭座取締を務めた。明治に入り東京に川崎組を興し（後に川崎銀行に改組）、金融業で財をなし、銀行・保険・鉱業などの事業を展開した。次の川崎正蔵とは無関係。

川崎正蔵（1837-1912）神戸川崎財閥の創始者。薩摩国鹿児島城下の生まれ。明治新政府の海運事業を引き受けて成功した後、東京築地の官有地に造船所を設立、さらに官営兵庫造船所の払下げを受け、神戸に川崎造船所を創業、重工業の財閥にした。†『造船王川崎正蔵の生涯』三島康雄著 同文館出版 1993 (K)

大倉喜八郎（1837-1928）大倉財閥の創始者。越後国の生まれ。幕末の江戸で銃砲店を開業し、幕府・諸藩に武器を売り込んで成功、明治以降は新政府の御用商人として、戊辰戦争、台湾出兵、西南戦争、日清戦争、日露戦争で莫大な利益を挙げた。大倉組を設立し、兵器販売のほか、貿易・鉱山・土木などの事業も展開、大正期には財閥を形成した。大倉商業学校（東京経済大学の前身）や日本初の私立美術館・大倉集古館も創設した。†『鶴翁余影』 鶴友会 1929 (Yかな)

森村市左衛門（1839-1919）森村財閥の創始者。江戸京橋の生まれ。武具用達商の6代目。開港を機に横浜に進出、輸入品販売に携わり、戊辰戦争の軍需品調達で資産をつくる。明治初年に一時破産、その後、異母弟・豊と森村組を興し、対米陶磁器輸出で成功した。森村銀行、日本陶器、東洋陶器などを創業、社会事業への寄付や私立幼稚園・小学校（現在の森村学園）の設立でも知られる。†『森村市左衛門』大森一宏著 日本経済評論社 2008 (Y)

以上、これらの人物のほとんどが明治政府やその要人との結び付きで事業を拡大した「政商」であるのは、時代の特徴といえる。また、「別編」でも渋沢より年長の実業家6人（茂木惣兵衛ら）を紹介している。